

【第1分科会】教育課程に関する課題

| | |
|---------------------|---|
| <p>提言1 研究主題</p> | <p>ふるさと唐津を愛し、心豊かにたくましく生きる児童生徒の育成（地域の人材や教材を円滑に活用するための副校長・教頭の役割）</p> |
| <p>提言者</p> | <p>唐津市立相知中学校 教頭 牛草美佳</p> |
| <p>協議内容</p> | <p>【質疑応答】</p> <p>Q：8つの役割の中で、特に重点を入れているところや困難な点は？</p> <p>A：8つの中で特に大切と感じたのは「持続性」について、雪だるま式に増えていく活動についてどう精選していくか。スクラップ&ビルドに心を砕いている。</p> <p>【グループからの報告】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 3校に1名配置されている地域COが「人材バンク」を作成中である。 ・ マニュアルを作成している。提言にあった8つの役割を教頭、副校長が全てを担うことには難しい面もある。地域の中の人材に中核となる方を置くことができれば、教頭はその中のいずれかに特に注力しやすいと考える。 ・ 「持続性」についての話題が中心となった。「この活動は今年もしないといけないのか？」という職員の問いに、目的を明確にすることの大切さを伝えている。そのことを再確認することができた。 ・ 8つの役割はどれも大切である。地域COの存在はありがたい。教頭よりも、長くいる職員の方が地域とのつながりが深いことがある。教頭は外部とのつながりを持つことを中心にすべき。予算の確保については、苦慮するところが大きい。 ・ 「持続性」の中でも、ボランティアういおに似合っていた方の後継者が課題である。人材バンクの更新をしていくことも必要になる。「北波多学校支援ボランティア総会」と銘打った総会を開き、そこでボランティア同士が顔を合わせることで、横のつながりができ、「持続性」が保たれているように思う。参考にしたい。 |
| <p>提言2 研究主題</p> | <p>「社会に開かれた教育課程」の実現に向けて（学校内外の人的・物的な地域教育資源を活用するための教頭の役割）</p> |
| <p>提言者</p> | <p>神崎市立神崎小学校 教頭 近藤ともみ</p> |
| <p>協議内容</p> | <p>【質疑応答】</p> <p>Q：A小学校は、地域連携カリキュラム一覧、ESDカレンダーは誰が作成したものか。どのような形でどのくらい教頭が関わっているのか、どのように更新しているのか。</p> <p>A：地域カリキュラムの枠は教頭が作成し、各担任で入力してもらい作成した。年度末に内容の見直しを行いながら更新している。ESDカレンダーについては、開発の関連で作成した。もともとある取組や題材を整理しながら作成した。新しく赴任された先生方にもわかりやすいようにと考えて作成した。</p> <p>【グループからの報告】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ A小学校の学級支援ボランティアの取組や方法がとても参考になった。メールによる依頼や断りであれば、ボランティアの方も気楽に学校に行きやすいと思う。どの学校でも取り入れ |

| | |
|---------------------|---|
| | <p>ることができそうである。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 令和元年度から温めていたものだが、コロナ禍のため、令和3年度に配付。活用できるシステムは整っているが、運用はこれからである。教務主任がQRコードを作成した。システムはICT支援員の協力を得て作成した。募集の仕方は「対象は〇年生、このような活動でいつから」とすると、それに対して、保護者から回答できるようになっている。町探検引率を中心に活用を考えている。 ・ 教職員アンケート、地域や保護者との連携の重要性が高かった。教育課程の見える化が先生の意識を高めている。新しく赴任される先生にも取組がわかりやすく、継続した取組が可能となるだろう。学習ボランティアにも活用できると思う。 |
| <p>指導助言者</p> | <p>学校教育課 義務教育担当係長 山崎 康隆 様</p> |
| <p>助言内容</p> | <ul style="list-style-type: none"> ○ 教頭の役割について。 ○ 研究の内容について。 ○ 教頭が担った部分と教務に任せた部分が明確、各学校の実践もわかりやすかった。 ○ いかに人材を活用するかが大事。 ○ バーコードによる募集の取組については、学校からのお願いとして広く活用できる。保護者も気軽に応募できるのではないか。また、気楽に学校に出向いていただけるようになるだろう。PTA活動の新たな取り組みとしても、意識が変わっていくのではないか。自分から動くことができ、自分の好きなことで活動できる。 ○ 地域資源の活用から一緒に活動する、協働という意識が必要である。 ○ 多久の家庭科ボランティア、「まなぶんジャー」「みまもるんジャー」などがある。 ○ コロナ禍で中止した時、引き継ぎが十分ではないため継続していくことが難しかった。残していくことへの課題がある。 ○ 業務は多忙化しているので、位置づけや意義を丁寧に説明していくことで理解が進んでいるということが、アンケート結果からわかる。 ○ ボランティア、ゲストティーチャーを、整理して、教育課程に位置づける。どのようにすみ分けをしていくのかは、教頭の役割である。 ○ 若手教員への周知が必要。学年単学級の場合、共有や引き継ぎの難しさがある。行事関係の引き継ぎについては、教頭がどこまで把握ができるだろうか。小規模校ならではの難しさがある。 |